

神宮と伊勢のまちを伝える

O I S E S A N N E W S

第4号

お伊勢さんニュース

伊勢文化舎 / 〒516-0008 三重県伊勢市船江 2-22-25 TEL 0596-23-5166 FAX 0596-23-5241 E-mail otayori@isebito.com

●企画・発行 伊勢文化舎
 ●発行日 令和6年10月10日
 ●発行部数 55,000部
 ●協力 神宮司庁
 神社本庁
 近畿日本鉄道(株)
 伊勢御遷宮委員会
 伊勢のお木曳行事調査団
 伊勢志摩観光コンベンション機構



公開された「御敷地」の前を通り参拝に向かう「神馬牽参」(外宮)

いよいよ来年、山口祭、御杣始祭が行われる！

「古殿地」は「御敷地」にー
第六十三回のご遷宮に向けて人々の期待が高まります。

神宮や地元の伊勢市では第六十三回ご遷宮(令和十五年予定)に向けた準備が動き始めました。

七月には内宮と外宮の「古殿地」に、「第六十三回式年遷宮御敷地」の表示が設置され、神域には説明板が立てられました。御正宮東のこれまでの「古殿地」は、今後は「御敷地」と呼ばれるようになります。地元では令和八年から始まるお木曳行事を控えて、町ごとに奉曳団が結成され、早くも奉曳車の調整や木遣りの練習が始まりました。

江戸時代から続く

御杣山・木曾

来年初夏、山口祭・木本祭に続く御杣始祭が長野県上松町内の木曾谷国有林で行われる予定です。御杣始祭はご神体をお納めする「御樋代」の御用材を伐採する神聖なお祭りです。この辺り一帯は赤沢自然休養林として知られ、古くから木曾ヒノキを産する貴重な天然更新^{*}の森が広がっています。ご遷宮に使われる御用材を伐り出す山は「御杣山」と呼ばれ、木曾では江戸時代から約三百年にわたり、御用材が伐り出されてきました。

前回のご遷宮でも木曾谷国有林、裏木曾国有林が天皇陛下より御杣山としてお定めをいただきました。

「三ッ緒伐り」は木曾の杣夫の誇り

さて、御杣始祭は神事のあと、内宮、外宮の二本の御樋代木が伝統の技法「三ッ緒伐り」によって伐り倒されていきます。この伐採を担うのが杣夫と呼ばれる、木曾の林業等に携わる人たちです。前回から保存会が結成され、技法の伝承に努めています。杣夫たちは「三ッ緒伐りは、木曾の杣人の何よりの誇りであり、証である」と語ります。杣夫たちの斧音が木曾の谷に響く日が、もうすぐ巡ってきます。

^{*}森林の伐採後、植栽を行わずに自然に種子から育った若木を定着させることで、森林の再生(更新)を図る方法のこと。(参考:林野庁HPより)

目次

- 2面 木曾ヒノキのまち
- 3面 長野県上松町・赤沢自然休養林へインタビュー 日本一の木を日本一のお宮へ
- 4面 木曾・裏木曾の森から伊勢の神宮へ
- 5面 いよいよ来年 御神木の祭りが始まる 御杣山や御用材について
- 6面 「せんぐう館」で知ろう
- 7面 式年遷宮の森を未来へ 後編
- 8面 お木曳行事入門講座 其の一
- 伊勢のお木曳行事調査団レポート②
- 伊勢志摩のまつり暦・ご案内

木曾ヒノキのまち 長野県上松町・赤沢自然休養林へ

赤沢の木曾ヒノキの森で、式年遷宮に用いられる御神木が育つ。江戸時代初期に大半の木が伐採された後、落ちた種から「木曾五木」と呼ばれるヒノキの仲間が生え育つ天然更新の森となった。緑豊かな森を、前回御神木の選定から伐採にまで関わった元神宮司庁営林部技師・村瀬昌之さん(69)と一緒に、上松町で木曾ヒノキを取り扱う池田木材代表・池田聡寿さん(63)の案内で歩いた。

樹齢三百年を 超える木曾ヒノキ

赤沢自然休養林は、標高一〇八〇メートルにある森林浴発祥の地。木曾林業を代表する歴史を持ち、一帯は江戸時代から森林政策によって保護され、樹齢三百年を超える木曾ヒノキの針葉樹林に、七つの散策コースが整備されている。ヒノキの自生する様子を間近に見ようと中立コースへ向

かった。大樹の前に将来の御神木となる木があるのでは、と期待するが「樹皮に傷がありますし、上の方で少し曲がっていますね」と、村瀬さんが即答し、さらに「御杣始祭で伐採する御種代木は、大きさだけでなく、欠点のない真っ直ぐな木が求められる。」しかもそれは内宮・外宮の二本が近い位置になければならぬ。木曾の天然林を守ってきたのは、尾張藩による厳格な保

護政策だ。関ヶ原の戦いで以降、木曾谷の森林伐採が急激に増加すると、「木一本首一つ」というお触れが出され、伐採を厳しく制限してきた。現在は「木曾悠久の森」として、維持管理がなされている。「古くから地域の木材産

業の継承や振興に大きな役割を果たしてきた温帯性針葉樹林を、厳格に復元するための保護です。天然のヒノキやサワラなどの針葉樹を中心にさまざまな植物や動物が生育し、まざまな植物や動物が生息し、世界的にも貴重で希少な森林です」と村瀬さん。

古式の作法「三ッ緒伐り」で御神木を寝かす木曾の杣夫

次に昭和六十年に行われた御杣始祭の祭場跡をめざした。そこに残る切り株は、内宮・外宮の御種代木で神木として崇められる。御杣始祭では神事後、斧を使った古式の作法「三ッ緒伐り(三ッ紐伐り)」で、杣夫たちにより奉伐され

だ。池田さんは「昔は木曾の山に一人近い杣がいたといわれ、その棟梁にあたる杣頭は斧の使い方はもちろん、人を統率できる品格と能力、知識を併せ持つての資格。腕がよくても事故を起こした人は棟梁には選ばれなかった。風や枝の張り具合、どこに木が寝たがる(倒れる)かを全て判断できる方でしょう」と話す。

木曾谷を走る 森林鉄道

川のせせらぎを遮るよう、ときおり森林鉄道が汽笛を響かせる。木曾谷では大正初期に鉄道運送が導入され、トラック運材に切り替わるまでの約六十年、その役目を果たしてきた。そして昭和六十年の御杣始祭で御神木を運ぶ様子が注目を浴び、観光列車として運行が再開された。



森林入口付近に拠点の交流センターや食事処、資料館、森林鉄道記念館がある



天然更新の芽を指差す池田さん



御杣始祭の祭場跡に残された切り株



日本三大美林の一つ。昭和45年(1970)に自然休養林第1号に認定された。爽やかなヒノキの森は環境省「かおりの風景100選」に選定

池田さんは当時二十四歳。木曾奉賛会長を務めた祖父・池田作二さんを車に乗せて祭場近くへ。「祖父に『木が泣くのを知ってるか』と言われてね。最後の斧が入るとき、ギイーツと、弦(伐り残した部分)のちぎれる音が悲鳴のように聞こえました。命ある木曾ヒノキを扱う材木商として、性根を据えさせてもらったのが、この祭りです」。



汽笛を鳴らす森林鉄道
は木曾川流送による方法が編み出され、沢にダム(堰)を作つて水を溜めた後に真ん中を抜き、一気に

に木材を流し出す技術が伝わっていた。「四十年間、定点観察をしている木があります」と、次に池田さんに案内されたのは、切り株から芽吹いた幼樹。高さ十センチほどで、これで四十年か自然任せの時間軸に言葉が出ない。木曾の山は傾斜が急なうえに岩盤の痩せた土地。寒さ厳しい過酷な環境で、天然ヒノキの成長は人工林の三倍ほどかかるというが、その分、年輪は緻密できめ細かく、耐久性にも優れた美しい材に育つ。

自然に種が落ち、根を張った場所や枝ぶりによつては大雪に倒され、春の雪溶けで起き上がり、これを繰り返して何十年何百年もかけて、美しい木曾ヒノキが育まれている。木曾五木：江戸時代、尾張藩により伐採が禁止されたヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ。

明治13年(1880)、明治天皇の御聖断を仰ぎ、伊勢神宮の遥拝所として建てられたのが「東京皇大神宮遥拝殿」、いまの東京大神宮です。皇室の御祖神である天照大御神をまつり、国民の総氏神と仰がれる伊勢神宮(内宮)の御神徳を皇都東京にあまねく宣布し、都民の心のよりどころとなるようにとの願いから創建され、140年余の歳月が流れました。「東京のお伊勢さま」東京大神宮は、いまも伊勢神宮と都民の心を結んでおります。



東京のお伊勢さま



東京大神宮

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-4-1
電話 (03) 3262-3566 FAX (03) 3261-4147
https://www.tokyodaijingu.or.jp/
JR総武線、地下鉄東西線・有楽町線・南北線・大江戸線「飯田橋駅」徒歩5分



御杣始祭(平成17年)での三ツ緒伐り(別名、三ツ紐伐り・三ツ伐りとも)。幹の三方向から斧を入れ、弦と呼ばれる三脚を残して、最後に伐倒方向と反対側の弦を伐って倒す技法

日本一の木を 日本一のお宮へ

あけまつまち
上松町
インタビュー

御神木に育まれた木曾人の誇り



夏の上松のまちに御神木の切り絵のポストターが貼り出された。来年予定されている御杣始祭の奉祝行事を今回はオール木曾で取り組むという。奉賛会、保存会、町役場の方々に話を伺った。

オール木曾で祭りを盛り上げる

多くの子どもに御神木祭を経験させたい



伊勢神宮木曾奉賛会
山田弘さん

来年予定されている御杣始祭まで、一年を切った。「『ひのきの里の夏まつり』では本番さながらに、御神木と同じ大きさの材を用意し、お木曳台車を出してみんなで練り歩きました」と伊勢神宮木曾奉賛会会長の山田弘さん(59)。
前回の平成十七年(二〇〇五)六月には「お木曳行事」が営まれ、二日目はお神楽や木遣り唄、太鼓演奏のほか木曾踊りといった伝統芸能を奉納し、コンサートも催された。その頃に比べると、現在のまの人口は四千人と約三分の二に減少。少子高齢化が進み、二十年前と同じことができないのかという不安も出たというが、「夏まつり」に集まった人々の意気込みは熱く、林業で栄えてきたまちを盛り上げようと、上松町だけでなく木曾郡全体が一体となって準備が進められている。

なんとしても御神木は木曾で伐る



上松町産業観光課
横井実さん

「地元祭りは日頃から氏神に仕える、上若連」が支えています。総勢二百人。十八歳から九十代までが一緒に活動しています」と上松町産業観光課長の横井実さん(59)。
獅子狂言や地歌舞伎など地域の伝統芸能を担い、結束も強い。横井さんは二十年前の御神木に関する行事の遂行に裏方として奔走し、「日本一の

三ツ紐伐りを後世に

木を日本一のお宮へ」と、御杣始祭で斧(ヨキ)を振った杣夫たちの「三ツ紐伐り保存会」もサポートしてきた。

木曾では過去十五回、御神木を伊勢へと送り出した三百年の歴史がある。しかし効率化により斧を使う機会が減り、三ツ紐(三ツ緒)伐りの継承が困難になり、当初は神宮式年造管庁*が奉伐を担当する話があった。

平成十七年一月、経験者や林業従事者を集め「なんとし

株まつり は木曾の歴史文化

現在、保存会のメンバーは十五人。岐阜県中津川市の「裏木曾三ツ伐り保存会」、そして神宮の営林部とも合同で練習を重ねている。

御杣始のことを考えない日はない



三ツ紐伐り保存会
吉川正樹さん

木曾で学校卒業後、山に入り、ぎこり」となった吉川正樹さん(58)は、前回は参加。「恥ずかしい斧を振りたいたい」と振り返り「御杣始のことを考えない日はない。次は指導する立場です」と話す。材木商の池田聡寿さん(63)も、立ち上げメンバーだが斧は振らない。「寝たばかりの御神木の先端を切り株の

山では慎重に安全第一



三ツ紐伐り保存会
橋本光男さん

でも木曾で伐る」と保存会が立ち上がり、斧を振る練習を繰り返した。当時神宮側の担当だった村瀬昌之さん(69)は「何度か上松に足を運び、練習を見守った。失敗はできませんから何本か伐つてもらって時間を見たり、条件をつけましたが、杣の技術にはびっくりしましたね。大きく育った木は枝張りや形状、重

山の文化を伝えるのも保存会の役割



三ツ紐伐り保存会
池田聡寿さん

真ん中に立ててお祈りをするのは、木曾で株まつり(鳥総立て)という儀式。山の命に感謝し、梢と根株の間の幹を大切にさせていただきますと誓い、根株の上に新たな命が芽生え大樹となる山の再生を祈る祭りです」と語り部に徹する。

奉賛会で事務局長の原田浩幸さん(62)は、「木曾と神宮さんのつながりは深く、この山で伊勢の祭りが繰り返され、木曾材は高い評価を受けています。御神木がこのあとどう使われるのか、祭りの意義もみなさんに知って欲しい」と話す。

遷宮との関わりは山が元気でいられる源



伊勢神宮木曾奉賛会
原田浩幸さん

時代は移れども御神木に携われる喜びと誇りが、木曾人に受け継がれている。



夏まつりで車を出してお木曳(上松町役場提供)

取材文 中村元美 / 撮影 阪本博文

伊勢内宮前
おかげ横丁
おかげさまで
30周年

伊勢名物 赤福

本店 〒516-0025 伊勢市宇治中之切町26番地
電話 0596-22-2154(代) カラダイト 0120-081-381
https://www.akafuku.co.jp

木曾・裏木曾の森から伊勢の神宮へ

裏木曾古事の森と 御神木奉搬の旅

岐阜県中津川市では来年、「裏木曾御用材伐採式」が行われる予定である。長野県上松町同様「三ッ緒伐り」の技法で御樋代木が伐採される。裏木曾の森を訪ねた。

「裏木曾古事の森」と 斧入式

前回御遷宮の平成十七年（二〇〇五）、御樋代木二本を伐り出す「裏木曾御用材伐採式」が国有林の「旧神宮備林」にて行われ、こちらでも裏木曾の杣夫たちの手によって伝統の技が披露された。その山を一目見ようと中



平成17年に御用材伐採式が行われた裏木曾の森（中津川市）

津川市付知から林道に入り、加子母の森へと車を走らせた。古くからヒノキが育ち、まだ標高の低い道沿いには、ヒノキによく似たサワラも立派に育っていて、里人は森を大切に守ってきた。現在は「裏木曾古事の森」として管理され、姫路城の昭和の大修理で「運命の木」と呼ばれた西大柱や、最近では名古屋城の本丸御殿の御用材にも利用されている。国道から離れること約四十分、急峻な地形にヒノキが並んだ尾根を遠望できる場所に出た。前回の伐採式は、あの斜面に斎場をつくり、内宮・外宮の二本の木を交差させ、滞りなく行われた。同じくこの森で、平成二十九年（二〇一七）十一月には次期式年遷宮に向けた「斧入式」が行われ、樹齢約百年のヒノキ一本が「裏木曾三ッ伐り保存会」により奉伐された。御用材として用いる木曾ヒノキの伐採は始まっている。



御神木が運ばれた護山神社（中津川市）

各地で歓迎を 受けながら伊勢へ

木曾山の御神霊を祀る、ふもとの護山神社を訪れた。ここには前回、伐採式のあと御神木が運ばれ、奉安祭・奉送祭を斎行し、翌日は中津川・恵那市民が参加し、「木遣音頭」や「おんほい節」などにぎやかに、約八キロの行程をお木曳で運んだ。

その後、長野と岐阜で伐採された御神木は、陸路で三日間かけて伊勢まで奉搬された。道中の各地で「奉迎送」の行事が行われ、さまざまな郷土芸能を披露して歓迎。御神木を一目見ようと沿道には多くの人々が集まり、その喜びを載せたまま、伊勢へと到着。御樋代木奉曳式の川曳、陸曳により、それぞれ内宮・外宮へと奉安された。（元）



桑名宗社（桑名市）に到着した御神木（平成17年）

いよいよ来年 御神木の祭りが始まる！

- 山口祭
- 木本祭
- 御船代祭
- 御樋代木奉曳式
- 御船代祭

前回遷宮に做えば、令和七年初夏には最初の御用材を伐り出し、神域に運び込む祭りが行われる予定だ。厳かに、また、喜びに満ちた祭りや行事が繰り広げられることだろう。

はじめは「山口祭」

式年遷宮諸祭のはじめは「山口祭」（今回は平成十七年五月二日斎行）。皇大神宮は神路山、豊受大神宮は高倉山の麓に祭場を設け、御神山の口に坐す神に御料木奉採の安全を祈る。五丈殿での古式ゆかしい「饗膳の儀」の後、五色の幣を掲げた小工や物忌の子どもたちが時代絵巻さながらに祭場に向かう。



山口祭の祭場に向かう。竹かごの中はお供えされるつがいの白鷄（外宮・平成17年）



忌火屋殿前で木本祭のお祓いを行う（内宮・平成17年）

「木本祭」は神秘的祭り

「山口祭」と同日の深夜に行われ、御正宮の心御柱の御料木を奉採する。両宮宮域内で行われる秘儀で、奉仕する神職ら以外に詳細は伝えられない。

木曾の御山で「御船代祭」

御神体をお納めする「御樋代」となる御用材を奉伐する。前回は長野県上松町と岐阜県中津川市に定められた御神山で「御船代祭」「裏木曾御用



五十鈴川を渡る内宮の御樋代木は風日祈宮橋の手前から曳き上げられる（平成17年）

川曳・陸曳で「御樋代木奉曳式」

伊勢の地に「御樋代木」が奉搬されると、両宮に運び込む「御樋代木奉曳式」が行われる。内宮へは川曳で五十鈴川を廻り、外宮へはその翌日、陸曳で山田のまちを進む。

秋には「御船代祭」も

秋の気配が訪れるころ、両宮の域内で「御船代祭」が行われる（今回は平成十七年九月十七日、十九日斎行）。御樋代をお納めする御船代御用材を奉採する祭りで、御正宮の祭りの後、御神山では御用材が奉採される。祭場では、続いて第一別宮、諸別宮の祭りが斎行される。（堀）



祝 第63回神宮式年遷宮 語り継ぐ、木曾の誇り、御神木

協賛 伊勢神宮木曾奉賛会 (一社) 上松町観光協会 伊勢神宮木曾奉賛会 HP 近日公開予定。オマツリジャパン HP 内において紹介中。 URL : <https://omatsurijapan.com/areastory/goshinbokusai/>

〒399-5604 長野県木曾郡上松町正島 2-45 Tel. 0264-52-2480

〒399-5601 長野県木曾郡上松町大字上松 159-3 Tel. 0264-52-1133

御杣山や御用材について “せんぐう館” で知ろう

式年遷宮のことが詳しくわかる「せんぐう館」。御杣山での祈りから、社殿の壮大さとそれを支える作業まで、木々についての情報も充実している。

本物の御扉がお出迎え

外宮、まがたま池のほとりに立つ「せんぐう館」。最初に迎えてくれるのは外宮御正殿の御扉だ。昭和二十八年（一九五三）から二十二年間、実際に使われていたもので、巨大なヒノキの一枚板も、御鑰などの金物も、七十年の歳月を経てなお、堂々たる風格と美しさだ。高まる期待感を胸に、奥の展示室に向かう。

見上げる御屋根に感動

展示室5に入ると、手前に



展示室6にある「木取り」や鯉木の調製工程

は外宮御正殿の殿舎配置模
型。二十分の一の大きさの精
巧な造りに目を奪われるが、
さらにその奥にそびえる外宮
御正殿の原寸大模型は、圧巻
と言うほかない。近寄って見
上げると、御屋根の高さ、棟
持柱の太さなど、驚きととも
にその壮大さを実感する。神
宮司庁文化部学芸員の深田一
郎さんは「神宮では宮大工の
ことを小工と呼びますが、原
寸大模型は神宮の小工と同じ
技術を用い、御正宮と同じ様
にヒノキ材を使って建てまし
た」と言う。

小工伝統の技

展示室6は、「神明造」と呼ばれる神宮社殿の建築と、その節目に行われる祭りについての展示だ。

小工の道具や伝統の技を示す木組みなども並んでいる。木の断面に墨で線や文字を記す「木取り」も小工の仕事の一つ。御用材を少しも無駄にせず、正しい寸



御正殿の原寸大模型の前では、せんぐう館職員による展示ガイドも行われる

法に切り出すため、心を砕くという。

鳥総立てに象徴される思い

遷宮では、御正宮だけでなく別宮の社殿も造り替える。この壮大な造替を支えるのは森。大量の御用材を供給する御杣山である。この展示では、古くは伊勢の神路山に設けられた御杣山が鎌倉時代から次第に他国の山になっていったことや、大正十二年（一九二二）から二百年の計画をもって行われている宮域林でのヒノキ育成のことが分かる。「ヒノキは日本の固有種です。使うだけでなく、育て、残さなければならぬ」と、山に携わる人々が思っています」と深田さんは言う。

御屋根の下に浮かぶ直線

遷宮では、御正宮だけでなく別宮の社殿も造り替える。この壮大な造替を支えるのは森。大量の御用材を供給する御杣山である。この展示では、古くは伊勢の神路山に設けられた御杣山が鎌倉時代から次第に他国の山になっていったことや、大正十二年（一九二二）から二百年の計画をもって行われている宮域林でのヒノキ育成のことが分かる。「ヒノキは日本の固有種です。使うだけでなく、育て、残さなければならぬ」と、山に携わる人々が思っています」と深田さんは言う。

神宮では、御屋根を葺く萱（ススキ）も萱山で育てている。御屋根の下をススキの茎をつないだ蛇腹で支えるが、展示されている蛇腹を見る

と、端の方にうっすらと直線が浮かんでいる。深田さんが聞くと、「一本ずつ茎の皮を薄くはいでいますが、先端部分の皮を一枚残しており、これを袴といいますが」とのこと。もう一度、御正宮の模型の下

に立つて見上げると、蛇腹はきれいに並び、端には一筋の直線が浮かんでいる。目立たぬところにも、繊細でいいねいな、そして膨大な量の作業がなされているのだ。

総立てがある。幹の部分で頂上、根本と梢を山に返して、感謝を奉げ再生を祈るとい

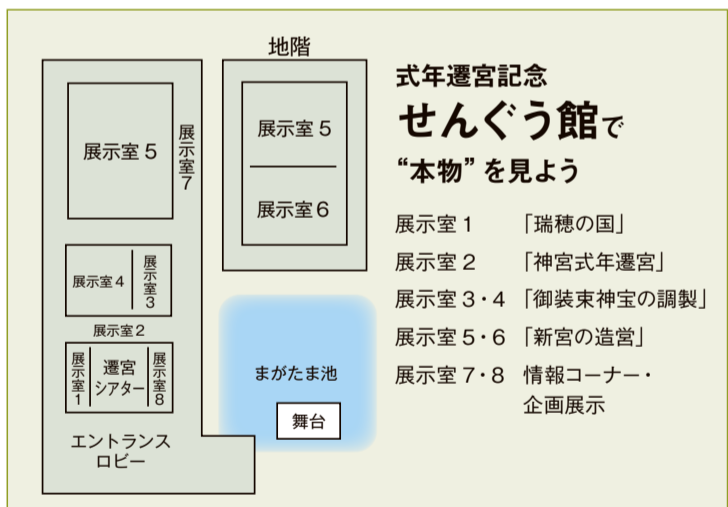


“鳥総立て”には山の神への感謝と再生の祈りが込められる

く、育て、残さなければならぬ」と、山に携わる人々が思っています」と深田さんは言う。



蛇腹の展示について話す、学芸員の深田一郎さん



式年遷宮記念 せんぐう館で “本物” を見よう

- 展示室1 「瑞穂の国」
- 展示室2 「神宮式年遷宮」
- 展示室3・4 「御装束神宝の調製」
- 展示室5・6 「新宮の造営」
- 展示室7・8 情報コーナー・企画展示

「せんぐう館」には、御用材のこと以外にも、稲の生育に沿って行われる神宮の祭りや式年遷宮の歴史、匠と呼ばれる人々が技術の粋を極

め、古式の通りに作り上げる御装束神宝の調製工程など、さまざまな展示がある。すべての展示室を回り、「せんぐう館」には、神と自然へのまごころが展示されているのだと感じた。

シアターの動画も充実しているし、まがたま池の景色も美しい。ゆっくり余韻を楽しむのがお勧めだ。

取材・文 堀口裕世

伊勢市豊川町前野126-1
0596・22・6263
午前9時～午後4時（観覧は午後4時30分まで）
毎月第2、第4火曜（祝日の場合は翌日）
入館料 一般300円、小中学生100円

豆腐庵山中
伊勢市宇治中之切町95番地
電話 0596・23・5558 木曜定休

お多福とともに
岩戸屋は
今も昔も内宮前
金時生姜を使った
岩戸屋の生姜糖

生姜糖 一口サイズ
生姜糖 大剣

伊勢・内宮前おはらい町
TEL 0596・23・3188
FAX 28・1322



神宮の森（伊勢志摩スカイラインからの遠望）

「神宮森林経営計画」 大正十二年から始まった未来への森づくり

伊勢の地で二十年に一度行われる式年遷宮。新たな社殿御造営には多くの御用材が必要となる。神宮の森では、御用材となるヒノキを持続的に育成する計画の下、式年遷宮とともに永遠に続く循環型の森林管理への取り組みが始まっている。

前号では神宮の森の沿革とともに、大正十二年（一九二二）に樹立された現在の神宮の森を管理する基本方針となっている神宮森林経営計画についてご紹介しました。今号では、式年遷宮の御造営に供される御用材を育成するヒノキ林の管理の方法や式年遷宮への展望についてご紹介します。

御用材となるヒノキ林の管理

式年遷宮の御用材となるヒノキは平均で直径六十センチ、太いものでは一メートルを超えるような大径木が使用されます。こうした大径木に育つまでの期間として、神宮森林経営計画では植林してから二百年を目途としています。

ここで、ヒノキ林の管理のあらましをご紹介します。まず、神宮の森の中から種を採取し苗木づくりから始めます。植林後は苗木の成長を阻害する雑草木の刈り払い、無節の良材にするための枝打ち

を行います。そして大径木に育成するために最も重要な間伐作業は、成長に合わせて十〜二十年間隔で繰り返し行います。間伐により御用材の候補となる形質の良い木の成長を阻害する周辺木を伐採し、林内の密度を調整します。密度はヘクタール当たり三〜四本植林したヒノキを百年目には二百本、二百年目には百本程度を存立させることを目安としています。

また、御用材候補として直径六十センチ以上を目指す木は一重ペンキ、直径一メートル以上を目指す木は二重ペンキで表示

式年遷宮の森を未来へ

神宮司庁営林部長／神宮技監 松永彦次

後編

し、将来まで残す木として選抜して管理しています。成長の一例として、昭和三年に植栽された二重ペンキ表示のヒノキは平均で直径五十七センチまで成長しています。このように順調に成長しているヒノキ林では間伐材の中にも御用材として使用できる良材があり、前回の遷宮では、量的には限られますが、実に七百年ぶりに神宮の森から伐り出されたヒノキが使用されました。

百年前から始められた神宮の森でのヒノキ植林は、昭和の時代に二千五百本まで造成され、神宮森林経営計画で目的とした規模に概ね達しています。今後は徐々に樹齢百年を超えるヒノキが増えていき、あと百年先には大半が樹齢二百年以上のヒノキの森となっていく予定です。机上の計算ではありますが、一回の遷宮で約一万本の木材が使用されることから、ヘクタール当たり百本の御用材候補木が存立するとして、将来の神宮の森は、式年遷宮二十五回分の御用材を五百年周期で循環させ

ていく持続可能な森林となっていく予定です。また、五百年周期での伐採を考えると、最初は樹齢二百年での伐採から始めても、徐々に伐採する木の樹齢は高くなっていきます。成長の旺盛なヒノキは樹齢二百年で伐採することなく引き続き成長を見守ることで、樹齢三百年、四百年で直径が一メートルを超えるような大径材を計画的に増やしていくことも夢ではないと思いついています。

初めての遷宮の時に御杣山とされた千三百年前の神宮の森は、奇しくも今回の五百年周期と同じ五百年ほどで伐り尽くされ、他の地域に御杣山が移っていくことになりました。現在進めているヒノキ林の育成は、千三百年前の森林を伊勢の地で再現し、今度はそれを持続させていくという壮大な挑戦の第一歩であるように感じています。

最後に、神宮の森からの御用材の供給は、今後も式年遷宮の度に増加していく見込みですが、まだまだ御用材の多くを供給できるまでには相当の年月が必要と思われる。また、江戸時代から何百年と木曾ヒノキを御用材として供給していただいていた中で、御杣山祭などは神宮の祭典であると同時に木曾地方の文化として根付いています。今後は、伊勢と木曾地方のヒノキの森が、それぞれの特徴や資源量を踏まえつつ、ともに持続的、循環的に末永く式年遷宮を支え続けていくことを願っております。

神宮の森を守る人々

内宮の南側に位置する神宮の森は、伊勢市の面積の4分の1にあたる約5,500㌥の広さがあり、内宮の宇治橋や御手洗場を流れる五十鈴川の源流部まで含まれます。

神宮の森では、神宮にふさわしい風致景観や五十鈴川の清らかな流れを守るための管理が行われるとともに、式年遷宮で使用される御用材となるヒノキが育成されています。また、神宮の祭典などに使用される榊をはじめ、木彫りの干支守の原料となる楠なども神宮の森の産物です。

このように神宮の営みを支える森は、神宮司庁営林部の職員によって守り育てられています。営林部には森林管理の計画を作る人、ヒノキの育成作業をする人、山火事や不法投棄がないよう巡視をする人などが働いています。それぞれの役割を担う職員が、神宮の森が百年先、千年先まで神宮の営みを支え続けることができるよう、未来に引き継ぐ森林管理を日々続けています。



神宮の森でヒノキの種を採る営林部職員



ヒノキが育つ神宮の森

私の旅行スタイル、ふるさと納税。

鳥羽市ふるさと納税

検索

鳥羽に旅行するなら「宿泊観光周遊券」が絶対お得！
寄附金額の3割分の宿泊観光周遊券をお贈りします。

鳥羽市観光協会



伊勢鳥羽方面へお出かけの際は、
観光施設割引がついた乗り降り
自由なバスフリーきっぷで！

1DAY
2DAYS
ワイド

フリー乗降区間や発売場所は
HPをご覧ください！

三重交通 〒514-8635 津市中央1番1号 TEL.059-229-5533
URL. <https://www.sanco.co.jp/>

令和八年第1次お木曳行事 入門講座 其の一

なぜお木曳は

始まったか

文 谷戸 佑紀（皇學館大学文学部国史学科 准教授）
江戸時代には各町が華美を競い合い、娯楽的な趣向になつていったお木曳。そのルーツは――。

夫役から 住民の奉仕へ

ご遷宮は、伊勢神宮の近くで生活する人々にとつても大切なお祭りであった。このことを象徴するものの一つが、今回取り上げる「お木曳」である。これは社殿の建替えに使用する御用材を地域の人々が宮域まで奉曳するという行事で、そのルーツは中世にまで遡る。
御用材の運搬については、古代においては、律令制の

お木曳事典

① 神郡・神戸

神郡は伊勢神宮領とされた郡。当初は伊勢国の度会・多気の二郡であったが、後に飯野・飯高・安濃・三重・朝明・員弁が加えられて八郡となる。神戸は神社に付与された民戸で、税である租・庸・調や雑役を納めた。

② 天正遷宮

中世後期に途絶えた式年遷宮

③ 山田奉行

江戸幕府が設置した遠国奉行。定員一〜二名。伊勢神宮の警護などを行うほか、鳥居前町とその周辺地域の司法・立法・行政

は、織田信長の遺志を継いだ豊臣秀吉によって天正十三年（一五八五）に再興された。尾張

例が確認できるようになる。



江戸時代のお木曳を描いた絵「大神宮御造宮御木曳畧圖」（皇學館大学神道博物館所蔵）。大賑がはためき華美を競った様子がわかる。

このように地域住民による自発的な「奉仕」としての性格が強くなってゆき、お木曳が誕生したと考えられる。ただし、近世最初の天正年間

完全に失われたわけではない。

「神領民」の 意識を育む奉曳

江戸期になると、奉曳車に飾り物を拵えたり、曳き手が扮装をしたりするなど娯楽的要素が加わり、今日に連続する住民主体の行事として確立する。娯楽的な趣向は次第に

過剰になったらしく、たびたび山田奉行「③」や住民組織「宇治会合・山田三方」④から華美を戒める通達が出されている。奉曳を行ったのは、両宮の鳥居前町（宇治・山田）のほか、神領となつていた地域の人々であったが、この行事への参加は、伊勢神宮との結びつきを実感することにつながり、自らを「神領民」とする意識を育んだ。

近代になり、新たな国家体制のもと遷宮が執り行われるようになると、不要となったお木曳は廃止の危機に瀕したが、これまで奉仕してきた住民たちの請願によって一部の奉曳が認められ、特色ある地域の行事として存続するところとなった。その後もいくつかの変遷を経て、今日に至っている。

伊勢のお木曳行事 調査団レポート ②

先人の記録に学ぶ

副団長 板井正斉

調査団では、学生とお木曳行事の文献資料を輪読し始めています。今回は、近隣の図書館などで比較的手に取っていただきやすいものを紹介します。

『伊勢のお木曳行事・白石持ち行事』（文化庁、昭和五十年）

国の無形民俗文化財として昭和四十一・四十八年の指定にあたりまとめられました。元神宮欄宜古川真澄氏らによる史資料の丁寧な提示と、第六十回の詳細な記録が含まれています。

『神宮の式年遷宮』（皇學館大学、昭和六十一年）

第六十一回にあわせて開催した本学月例文化講座の講演録です。櫻井治男先生の「お木曳きとお白石持ち」は、話し言葉でわかりやすく読みやすい一冊です。

『伊勢市史』（八、民俗編、伊勢市、平成二十一年）

特に「奉曳団の諸相」は、第六十二回の各奉曳団の現状と課題を記録しており貴重です。

『伊勢のお木曳』（伊勢文化舎、平成十八年）

『伊勢のお白石持』（伊勢文化舎、平成二十五年）

豊かなビジュアルと地域に密着した聞き取りによる記録は大変参考になります。

先人の記録に学び、次回行事を心待ちにします。
（いたいまさなり／皇學館大学文学部 神道学科教授）

予約受付中！

2025年「伊勢講暦」

<11月上旬発行>

テーマ「お伊勢さん ご神木ゆかりの地をゆく」

「伊勢講暦」は神宮と神領の一年がわかるカレンダーです。2025年には、いよいよ第63回ご遷宮の諸祭行事が始まります。ご遷宮に使われるご用材は、木曾（長野県）の御杉山で伐採され、伊勢へと運ばれて神宮神域に納められます。ご神木をテーマに、ゆかりある地の写真と和歌や俳句をご紹介します。

1部 1,700円（送料込み）・2部 2,400円（送料込み）
7枚綴り（表紙+6枚）



お伊勢さんの広報誌 瑞垣 を読んでみませんか

年に3回、神宮の折々の話題をお届けします

*ご希望の方に見本誌（最新号）をお送りしています

お手紙またはFAXに、住所・氏名・電話番号・『瑞垣』希望とご記入の上、神宮司庁広報室までお送り下さい

お問合せ▶ 神宮司庁 広報室

〒516-0023 伊勢市宇治館町1
TEL: 0596-24-1111
FAX: 0596-22-5503



三重県内の主な書店・Amazonでも購入できます
詳細はHPで <http://www.isebito.com/>
お問い合わせ 伊勢文化舎 ☎0596・23・5166

伊勢志摩のまつり暦

10月

1日(火) 御酒殿祭

神嘗祭にお供えする御酒がうるわしく醸造できるよう祈り、全国の酒造業の発展を祈願する伊勢祭。

5日(土) 御塩殿祭

年中の諸祭典にお供えする堅塩を焼き固める祭り。全国の塩業の発展を祈願する。

12日(土) 浜島神祭

宇気比神社の神祭。神の恵み、五穀豊穡、大漁満足、山幸海幸に感謝し、実りの秋を寿ぐ祭り。子ども神輿や御舟曳きが行われる。

12日(土) 第25回伊勢の伝統の能楽まつり

伊勢の伝統芸能、仕舞、狂言、連吟、独吟、舞囃子などが披露される。

12日(土)・13日(日) 伊勢まつり

マーチング、神輿、太鼓などのパレード、イベント広場での演奏やダンスなどが行われ、出店もあり賑わう。

14日(月・祝) 神御衣祭

神服織機殿神社・神麻織機殿神社で奉織された和紗(絹)・荒紗(麻)の二種類の神御衣が縫い糸や針を添えて供えられる。

15日(火)・25日(金) 神嘗祭

その年の新穀を神様に供えし、豊穣に感謝する。恒例祭典の中で最も重要な祭り。

11月

2日(土)・3日(日) 秋の伊勢祭

伊勢志摩の地場産品などが並び、地元の人や観光客で賑わう。年2回開催される。

4日(月・振)・5日(火) 猿田彦神社 秋季例祭

みちひらきの神様・猿田彦大神を祀る神社の秋の例祭。

4日(月・振) みなみいせまつり

まぐろの解体ショーなどが行われ、物産販売も行われる南伊勢町の祭り。

5日(火) 倭姫宮秋の例大祭

倭姫宮御杖代奉賛会による倭姫宮の例祭。祭典のあと神楽が奉納される。

16日(土) 伊勢おかげ嬉楽祭

新嘗祭を奉祝して、伊勢の伝統音楽と縁のあるアーティストとの音楽の共演を、伊勢の神様に奉納する祭り。

12月

1日(日) 御酒殿祭

12月の月次祭の御酒が、うるわしく醸造されるようお祈りをする。

15日(日) 夫婦岩大注連縄張神事

夫婦岩に大注連縄を新たに張り替える神事。木遣り唄が流れる中、お祓いを受けた三本の注連縄が氏子らによって張り渡される。

31日(火) 大祓

新年を迎えるにあたり、大宮司以下の神職・楽師を祓い清める。



初穂曳川曳

ミュージアム情報

斎宮歴史博物館

10月5日(土)〜11月24日(日) 開館35周年記念 特別展 中世の斎宮とその時代背景

「転換期を生きた斎宮たち」 中世の斎宮制度の様相と廃絶にいたる要因を斎宮たちの動向とともに紹介する。

多気郡明和町 開館9時30分〜17時(入館は16時30分まで) 休館日 祝日の場合は翌日

TEL 0596-523-8000

神宮徴古館

開催中 11月12日(火) 特集展示「和・文化と芸能」(第二期) 別館

日本に昔からある文化や芸能を、絵画や実物に使用されていた道具などを交えて展示。

伊勢市神田久志本町 開館9時〜16時30分(入館は16時まで) 休館日

TEL 0596-22-1700

式年遷宮記念神宮美術館

開催中 12月24日(火) 特集展示「令和5年度奉納 神宮式年遷宮奉賛美術品展」

令和5年度に当代を代表する芸術家の方々から神宮に奉納された美術工芸品を公開。

伊勢市神田久志本町 開館9時〜16時30分(入館は16時まで) 休館日

TEL 0596-22-1700

寶日館

11月13日(水)〜20日(水) 12月11日(水)〜18日(水)

現代美術・金子未弥展

人々の記憶にもとづいて実在しない都市を思い描く現代美術家の金子未弥(クリエーターズワークショップ)の作品展。作品展に先立って11月1日〜4日はワークショップも行われる。

伊勢市二見町 開館9時〜16時30分(最終入館 休火曜日 祝日の場合は翌日)

TEL 0596-43-2003

鳥羽市立 海の博物館

10月5日(土)〜令和7年1月13日(月) 祝 海の博物館ギャラリー写真展

「海、なりたい。」 三重県で祭りや民俗、漁などの撮影をライフワークにする阪本博文氏(小紙カメラマン)。海に生きる人々のいろいろな(生業)に思いを馳せ、映し出された表情に生きる力強さが感じられる写真展。

鳥羽市浦村町 開館9時〜17時(3/11〜13) 9時〜16時30分(12/1〜2/末)

入館は閉館30分前まで 休 6月26日〜30日、12月26日〜30日

TEL 0599-32-6006

ご案内

伊勢の和紙人形作家

阿部 夫美子氏 遺作展

テーマ 「和紙夢現」

主催 おかげ横丁 協力 伊勢文化舎

●期間 令和6年11月30日(土)〜12月15日(日)

●前期 和紙人形集「和紙夢現」に掲載されている伊勢ゆかりの神々、女性像の仏さま、伊勢ゆかりの人物、等約40点を展示

●後期 令和7年2月中旬〜3月中旬予定(ひな祭り) 催事

●会場 おかげ横丁おかげ座(前期) 大黒ホール(後期) 入場無料

お問い合わせ おかげ横丁総合案内 伊勢文化舎

TEL 0596-23-8838

TEL 0596-23-5166



和紙夢現

お伊勢さんのお正月

伊勢が最も賑わうお正月。神宮でも新しい年を寿ぎ、多くのお祭りが行われる。

年越し参り

大晦日、神宮では大小の篝火が焚かれ、参拝客らは炎を囲んで暖を取る。伊勢ではこの篝火で焼いた餅を食べると、その一年は風邪をひかないと言われ、年越し参りをする人も多し。

お正月(元旦〜3日)

午前0時から、内宮、外宮神楽殿で初神楽の奉納がある(事前申込み、要初穂料)。元旦の未明(内宮4時、外宮7時)からは新しい年の始まりを祝い、五穀豊穡、国の繁栄、国民の平安、皇室の弥栄をお祈りする歳旦祭が、3日には両宮初め諸宮社に大御饗をお供えする元始祭が行われる。

一月十一日御饗

正月の賑わいが少し落ち着いた頃に、内宮四丈殿で1月11日午前10時から御饗が供えられる。これは神宮125社に祀られる、すべての神様に御饗を奉る祭りで、神々が堂に集う。神様の新年会、とも呼ばれている。その後、午後1時より神楽殿の隣にある五丈殿で、6人の舞人による古式ゆかしい東遊が神々に捧げられる。

次号は 令和7年7月上旬発刊予定

スタツフ 発行人 中村賢一 編集長 中村元美 編集 堀口裕世 出口伊都穂 福所淳子 制作 高木恵奈(アイブレーション) 印刷 大享印刷(株)

記布・購読のご案内
本紙の記布先▶【三重県内】神宮(内宮・外宮・別宮)、伊勢志摩エリア各市町の観光協会、観光施設、土産飲食店等、近鉄の主要駅【三重県外】近鉄の主要駅、東京大神宮(飯田橋)、三重テラス(日本橋)、全国の神社庁ほか
購読の場合▶5部まで300円(送料込)住所、名前、電話番号、メールアドレス、部数を記入し、伊勢文化舎までお送りください(切手可)
〒516-0008 伊勢市船江2-22-25
伊勢文化舎内「お伊勢さんニュース」係
TEL 0596・23・5166

近鉄 しまかぜ Premium Express SHIMAKAZE
大阪・京都・名古屋⇄伊勢志摩
特急券の予約・ご購入
特急券発売箇所
特急券発売駅の窓口、主要旅行会社、インターネット予約・発売サービス
運行日
大阪発着:原則水曜日を除く毎日運行
京都発着:原則水曜日を除く毎日運行
名古屋発着:原則水曜日を除く毎日運行
※車両設備などの事情により予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。